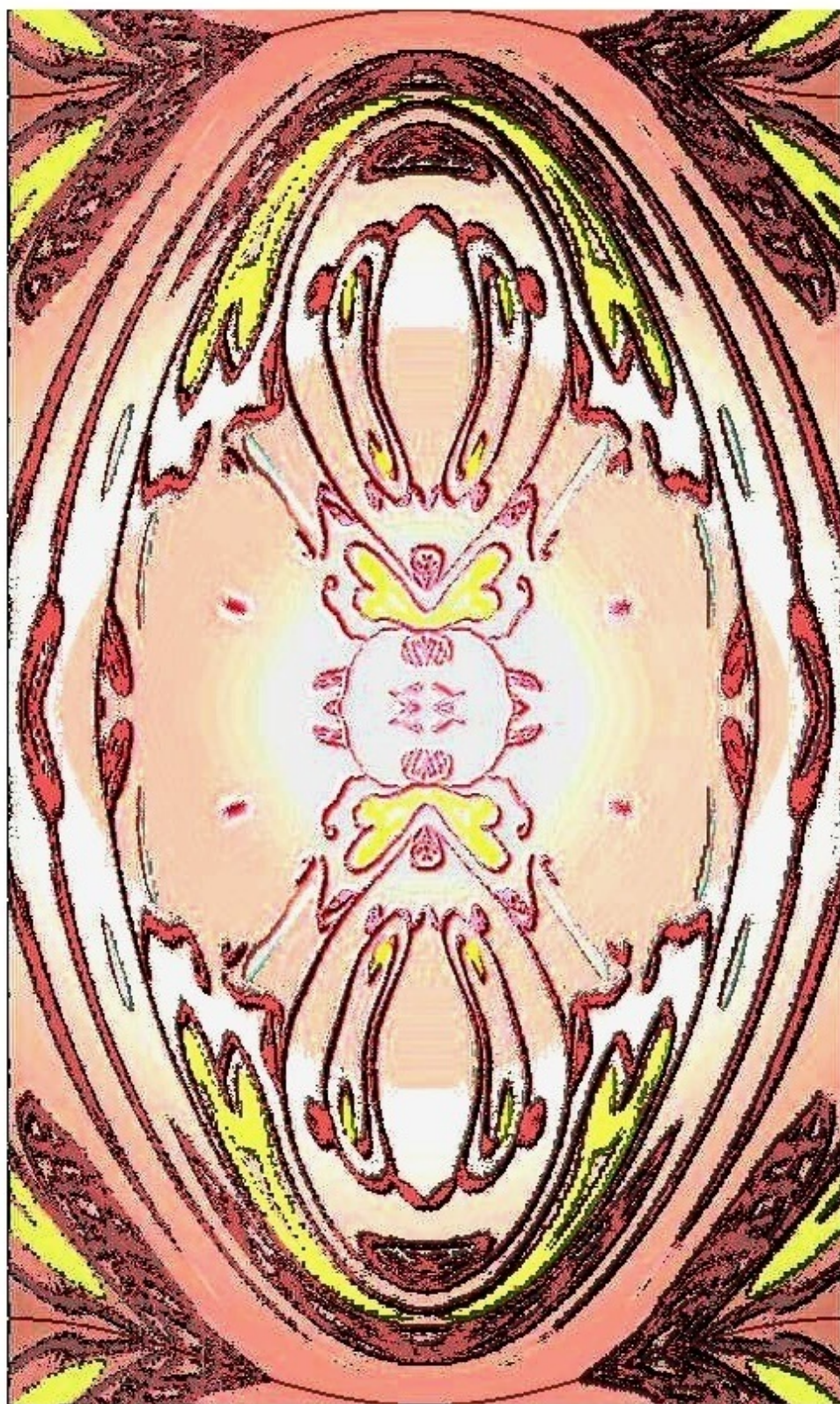


布志木の家のアリンコ



mikatuki98

新興住宅街の一角で、大福さんと喉飴さんの奥様が立ち話をしている。

「ねえ奥さん聞いたあ〜？ 柿木さんちの柱、風呂場に近い所の一本がシロアリにやられたんですって」

「うんまあ〜奥さんそれホントの話ですか？ うちは大丈夫からしら」

「ねえねえ、シロアリさんがどうかしたのお〜？」

「え！？ あっ！ 布志木さんちの白桃ちゃん。 な・なんでもないのよ。 ホホホ、相変わらず白桃ちゃんは色白で可愛いわねえ〜 大きくなって虫に食われないようにね」

「うんまあ〜大福さんたら。 ホホホ、おたくの一悟くんも男の子なのに色白で可愛いじゃありませんこと？ うちの花梨なんていつまでたってもオテンバで心配だわ」

「あら、喉飴さんちは檸檬ちゃんと蜜柑ちゃんの双子の大人しいお姉ちゃんが居らっしゃるからよらしいじゃありませんこと？ 一人くらいオテンバでも。 ホホホ」

「ふう〜〜〜ん、シロアリさんはオテンバなんだね」

「あ、白桃ちゃん！ まだそこに居たのね？ ねえ、今おばちゃんたちが話してたこと、柿木さんちのおばちゃんにも、それから白桃ちゃんのママにも内緒よ。 いい？」

「ん〜？ ないしょ??」

「そう！ ないしょ！！」

「うん。 わかった。 ないしょだね。 あっ！ ママだ！ じゃあまたね〜 いちごくんのママと、れもんねえちゃんとみかんねえちゃんのママ、バイバーイ」

「はい、さようなら〜」

ママを見つけた白桃ちゃんが急いでママの側に駆け寄って行った。 ママの方では、走ってくる白桃ちゃんを見て驚いた顔をしている。

「白桃ちゃんどうしたの？ ダメじゃない。 お家で待ってなきゃ！」

「うん。 でも、やくそくのおじかんがきてもママがかえってこないんだもん」

「ああ、ごめんごめん。 ハチミツ買い忘れたの思い出して、ちょっとスーパーに後戻りしちゃったのよ」

「ハチミツさん？」

「そう、ハチミツ！ この前、アリンコが沢山たかって真っ黒になってたでしょ？」

「うん。 すごーくたくさんのアリンコさん。 チョコフレークみたいだったね。 キャハハ」

「うう、チョコフレーク…… そ・そうね」

「あ、ねえ、ママ。 今ね。 いちごくんのママとれもんねえちゃんとみかんねえちゃんのママとあったよ」

「そうみたいだったわねえ」

「あれ？ ママしてたの？」

「うん。 おばちゃんたちが遠くから見えたの。 でも、白桃ちゃんが居てビックリしたのよ。

ねえ、おばちゃんたちと何かお話してたの？」

「う〜んとねえ〜 かきのきさんちはシロアリさんなんだって」

「えっ！？ シロアリ？（発生したのかしら？）」

「うん。 でね、シロアリさんはオテンバなんだって」

「オテンバ？」

「うん。 おうちのアリンコさんもオテンバ？」

「ああ～ ハハハ。 そ・そうね。 ハチミツを沢山食べるオテンバさんね」

「わあ～い。 アリンコさんもオテンバ・オテンバ！」

「あ、白桃ちゃん。 まさか家のハチミツにアリンコが集ってたお話を大福さんと喉飴さんのおばちゃんにしないわよね？」

「あ、おはなしするのわすれてた！」

「いいの、いいの。 そんなことお話しなくてもいいからね！」

「いいの？ あ～よかった」

親子仲良く会話をしながら自宅に戻ったふたり。 先にキッチンのドアを開けた白桃ちゃんが叫んだ。

「あーっ！ ママ、またアリンコさんがいっぱいいるよ～～～」

「えっ！？ どこ？ どこどこ？」

「ティッシュのはこのところ」

「ウゲッ！ ヤダ！ また来てる！」

「ねえママ？ アリンコさんはティッシュもたべるの？」

「あああああああああ～～～～～」

「ねえママ？ ティッシュをとってもとってもアリンコさんがいるよ～」

「あああああああああ～～～～～ 白桃ちゃん、触っちゃダメよ！」

「あ～わかった！ シロアリさんだ。 しろいティッシュにあつまってるからシロアリさんだ。

そうだ！ こんどいちごくんとれもんねえちゃんとみかんねえちゃんのママにおしえてあげようっと！」

「あああああああああ～～～～～ そんなこと言ってはいけませんよ！ 絶対に！ 白桃ちゃん、わかった！？」

「な～んだ、つまんないの。 オテンバなシロアリさんがおうちにもいたのに……」

「あああああああああ～～～～～ もうおき場所変えておいたのに！ 何でまた来るのよ～！」

アリンコの黒集りにワナワナと震えるママ。

『やはり罠のハチミツをティッシュから離して置いておくべきだったか！？ しかし黒山のように集ってしまったティッシュの箱のアリンコをどうやって追い出すか！？ 蟻退治＜アリハウスコロリンコ＞なんて非人道的な手段をこの私が選べるとでも思ってるの？ これでも幼い頃は昆虫たちと心を通わせていた人間よ！ それよりも何故ティッシュに集るのかの原因を究明した方がいいわね。 前回はなけなしのティッシュを箱ごと捨てざるを得なかったもの。 まだ2・3枚しか使っていなかったのに…… こうなったらアリの生態図鑑でも買うか！？』

「……ねえ、ママ。 どうしたの？ おかおがすごくこわいよ～」

『アリの生態…… アリの生態…… 図鑑買うよりパソコンでググル方が早いわ！（ワナワナ）』

「ねえ、ママったらあ～ あ、アリンコさんがママのうでにのぼってきてるよ～」

「へっ！？ ウギャ～～～～！！ し・し・しろももちゃん！ ティッシュの箱をこっちに持って来ちゃダメじゃない！ ウギャ～～～～！！ お・お・お庭に捨ててらっしゃい！」

かくてアリンコだらけのティッシュの箱は、勇敢な白桃ちゃんの手によって庭に掘り投げられた。 その日の夜、雨が降り出してティッシュの箱はずぶ濡れになり、翌日、晴天の庭ではティッシュの箱からアリンコの姿は消えていた。

そして居間では、白桃ちゃんが喉飴さんちのおばちゃんから貰っていた飴玉を口から落としたのか、庭から隊列を組んでやって来たアリンコがフローリングの上の飴玉に行進している。 いずれママもそれに気付くだろう。 了